

第十九回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

大泉 光一 著『支倉常長 慶長遣欧使節の真相肖像画に秘められた実像』

(2005年9月30日 雄山閣 刊)

大泉 光一 おおいずみ こういち 昭和18年(1943)生まれ。長野県出身。専攻は、日墨・日欧交渉史、危機管理論、国際経営論。メキシコ国立政経工科大学(I PN)大学院及びインスティトゥート・デ・エストゥディオス・ユニベルシタリオス(IEU)経営大学院(メキシコ)修了。博士(国際関係)。日本大学国際関係学部・同大学院国際関係研究科主任教授、青森中央学院大学大学院兼担講師(受賞時)。現在は青森中央学院大学教授。著作は、日墨・日欧交渉史の關係に、『一七世紀における日墨商業外交交流史』(スペイン語版)、『支倉常長』、『慶長遣欧使節の研究—支倉六右衛門使節を巡る若干の問題について—』、『支倉六右衛門常長—慶長遣欧使節を巡る学際的研究—』、『メキシコにおける日本人移住先史の研究』、『捏造された慶長遣欧使節記』がある。

受賞のことば

東京オリンピック開催の年にメキシコの学舎で私のライフワークとする慶長使節の研究を始めてから四十数年の歳月が流れましたが、この度は権威ある和辻哲郎文化賞を受賞することになり、大変光栄なことと思います。私にとってこの受賞は、次のような理由でとてもうれしく思います。それは、東西文化交流史の観点から、私が仙台市博物館所蔵の支倉将来の国宝肖像画とローマ・カヴァツァ伯爵所蔵の肖像画に関して精細な考証を行った結果、それらに対する加筆・改作の事実を解明したことが評価されたことです。これら二つの肖像画の存在がこれまで慶長使節に対する歴史的評価を高め、同使節の偉業を決定付ける役割を過分に担ってきただけに、今回の和辻哲郎文化賞の受賞により、従来、慶長使節に関する美術作品の観察からの独善的研究が支配的であった状況を打破する契機になったことは何よりも嬉しく存じます。

《選考委員評》

正しい歴史のために

陳 舜臣

大泉光一氏の『支倉常長 慶長遣欧使節の真相』が第十九回和辻哲郎文化賞「一般部門」に選ばれた。

選考委員会に出席する前に、私は今回がかなり難航するのではないかという予感をもった。はたしてその通りであった。

候補作の傾向として、論旨が拡がりを見せるものと、それが凝縮して行くものがある。どちらがすぐれているといった優劣の問題ではない。便宜的に私は、多極化と一極化に分けている。あくまで傾向である。大泉氏のこの作品は、典型的な一極集中的なものというべきであろう。その点では、みごとというほかはない。

大泉氏のこの作品には、「肖像画に秘められた実像」という副題がついている。論文の大部分が肖像画の検証に費やされ、現存画の不自然さを突いている。悲運の人を栄光の人にすりかえようとする、歴史の捏造に対するはげしい怒りが行間ににじんでいるようだ。

歴史の捏造、あるいは歴史の美化などは、四百年前の史実の問題であるにとどまらず、現代史の問題でもある。本書を読んでいるうちに、もうすこしひろがりがあればという不満が、いつか消え失せた。もっと突け、もっと突けると、熱烈な応援団の心境になっていたのである。一極集中の迫力を久しぶりにかんじたようにおもう。

一部の人たちの主観により美化され歪曲された歴史が、時には常識となる危険性は、いまなお存在している。大泉氏が鳴らした学問のしずかな警鐘を多くの人にきいてほしいと願う。

支倉常長という歴史上の人物を、素材として、さまざまな時代の、さまざまな人間が、さまざまな意図をもって、変更を加えてきた。それを洗い直す作業を、肖像の改変を辿ること

によって行っている。正しい歴史を知るためであり、その意義は大きいといわねばならない。

梅原 猛

一人の学者が一生に一冊しか書けないような著書がある。長年にわたる苦心の研究の結果、確証を得て、粘り強く論証された書物である。私は大泉光一氏の『支倉常長 慶長遣欧使節の真相』を、そのようにひたすら真理を追究しようとする学者の長年にわたる研究の結果、書かれた本であると思う。

支倉常長は謎の人物である。彼がどのような意思で伊達政宗によってローマへ送られ、ローマやスペインにおいてどのような扱いを受けたのか、まったく分からなかったが、大泉氏の著書によってこの謎であった支倉常長の人物像が浮かび上がり、私は、彼の悲劇的運命について同情を覚えざるを得なかった。

ローマやスペインにおける教会の中には、安土桃山時代及び江戸時代初期の歴史の謎を解くキリスト教関係の未知の史料がたくさん存在していると思われるが、日本歴史研究者でラテン語、イタリア語、スペイン語などを読める研究者は少なく、その研究はまだ十分とはいえない。しかし大泉氏は何度も何度も教会を訪ね、古い文書を読み、支倉常長の遣欧使節の真相を明らかにした。

特に興味深いのは、支倉常長像とされる二枚の写真の鑑定である。大泉氏は、教科書などに載せられている支倉常長の像とされる写真が、やつれた姿から頼もしい姿に変造されたことを克明に分析する。そしてそれら二枚の写真のうち一枚は支倉常長の像ではなく、秘書官の小寺外記の像であるとするのである。この写真変造説は一見支倉常長にケチをつけるもののように思われるが、私は、それはすでにキリスト教への弾圧が行われている時期に訪欧した支倉常長の苦悩の様子を明らかにするものであると思う。

人文科学も科学である以上、やはり新しい学説を大胆に提出し、それをあたらかぎり丹念に論証するものでなければならない。大泉氏の勇気と粘り強さに敬意を表するものである。

山折 哲雄

著者が半生をかけた労作である。十七世紀初頭、日本と西欧世界に橋をかけようとした「慶長遣欧使節団」の波瀾に富んだ大事業がいったい何であったのか、その謎を追って資料を探索し、研究の旅を重ねて、リーダー支倉常長の実像を追おうとしている。

使節団の一行は総勢百八十人。常長とその従者二十名にフランシスコ会宣教師のルイス・ソテロ。かれはスペインの上流貴族の出でフィリピン経由で来日、徳川家康にも知られていた。その外に各地から馳せ参じた商人、メキシコ大使ビスカイノとその部下の航海士や水夫などから編成されていた。その日程は慶長十八年から元和六年まで七年にわたっている。メキシコまでの三ヶ月の太平洋横断、そのあと大西洋を渡ってセベリアまで五ヶ月を要し、スペインに十ヶ月滞在してローマへ。そのローマを去ってふたたびスペインへ、さらにメキシコ経由でマニラ、長崎に帰ってくるまで五年の時日を費している。

時代背景はどうだったのか。かれを派遣した伊達政宗の野心、そして家康の外交方針とそのキリシタン禁圧の動きにも目をくばりながら、この使節団の目的が通商を軸とした軍事同盟の締結だったのかどうかを検討されていく。キリスト教世界ではイエズス会とフランシスコ会が対立し、使節団の行動も思うにまかせなかった。スペイン国王の臨席の下に受洗した常長ではあったが、通商交渉ははかどらず、国内では禁教の圧力が強まって政宗も政策を転換していた。その常長の苦悩の生涯が、本書の第二部では残された肖像画の分析を通して明らかにされていく。戦いの最前線で突進を命じられ、やがて背中を撃たれた悲劇の人物の肖像がこうして浮かび上がってくる。

和辻哲郎のいう「鎖国」の世紀に、こういう日本人が必死な思いで生きていたということをも明らかにしたという点で、大泉光一氏によるこんどの仕事は真に画期的なものであると思う。